



## お爺さんはなぜ山へ柴刈りに行くのか？

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 評議員  
日本農業株式会社 取締役兼常務執行役員 研究開発本部長  
今埜 隆道

「昔々、ある所にお爺さんとお婆さんがいました。ある日、お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。」これは有名なおとぎ話「桃太郎」の冒頭部である。このくだりで、お婆さんの行動に関しては、その後に川上から流れてくる桃を拾う役目が明らかとなるので、川に行く必然性は理解できるのだが、お爺さんは何故町ではなく山へ、しかも鳥や獣ではなく「柴」を刈りに行ったのか？ この一見、物語には必然性のないお爺さんの行動に疑問を感じたのは、じつは学生時代であり、今のようにネット検索ができる訳でもなく、答えを求めて図書館や本屋を探し回った記憶がある。そして遂に何軒目かの古本屋で目的物を発見した時の感激は今でも忘れられない。すでにご存じの方もおられると思うが、改めて謎解き例を紹介したい。まず、その書物では、おとぎ話における「川」、すなわち「水」の重要性が説かれており、おとぎ話を作った農民にとって水は神様のように重要な存在だったということ。お爺さんが山へ行った理由は、その川に宿る「水の神」への貢物を得るためであること、またその貢物は狩猟民族であれば鳥獣となった筈だが、農耕民族では山菜や柴となり、さらに山菜では敢えてお爺さんが採りに行く必然性は無くなるため力仕事の柴刈りにしたこと、そしてその貢物を川の中の「水の神」へ供えた結果として、「水の神」からの返礼が「桃太郎が生まれる桃」となったこと。これらの信仰心によるト書き部分が昔は物語に含まれていた筈だが、語り継がれていくうちに省略され、今のようなエッセンスだけが残されたという（十久尾零児著「五大御伽噺の謎」より）。

「お爺さんはなぜ山へ柴刈りに行ったのか」と疑問を持つこと自体、いかにも暇だったと思うが、それを民俗学の一環

として研究された方もしっかりいたということに勇気づけられ、それ以来、何かに行き詰った折には必ず思い出す一節となっている。つまり、物事には必ず因果があり、原因を追求すれば解決案が見出されるという信条に繋がっている。

ところで、このようなおとぎ話に内在する農耕民族としての日本人の特異性は色々な場面で話題になっており、農業業界でも感じることは多い。例えば、昨今の新規農業開発では日系企業の創業力やオリジナリティーが世界的にも注目され、統計資料上の数字にも表れているが、これは幾多のノーベル化学賞受賞者を輩出している我が国の化学技術の基盤が高度に洗練されていることに加え、古くからDNAとして伝授されている農耕民族の魂、すなわち種を播いてせつせと水を遣り、肥料を与えて気長に収穫を待つ、そして生育途中の観察を怠らず、何か変化があれば迅速に対応するという粘り強さときめ細かさのなせる業と思われる。

時代は変わり、山の柴刈り作業や川での洗濯も殆ど見られなくなり、「柴刈り」自体を知らずに「芝刈り」と思う世代も増えてきた。また、今年の4月には「女性活躍推進法」も施行され、物語とはいえ、柴刈りをするのはお爺さん、洗濯するのはお婆さんと決めつけるのは如何なものかと思われる向きもあろう。しかし、おとぎ話は親から子へ、祖父母から孫へ、絵本や漫画とともにその心が無意識のうちに引き継がれ、いつの間にか日本人の精神構造の形成に大きな影響を与えているのではないかと想像する。難しい話は抜きにして、おとぎ話に共通する農耕民族としてのものの考え方を今後も伝承していきたい。